
闇に囚われし者～ダークメビウス～

とびUO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に囚われし者〜ダークメビウス〜

【Nコード】

N7057E

【作者名】

とびうお

【あらすじ】

突如、闇に飲み込まれた小学校。そこに閉じ込められた少年少女……そこでは《闇のGAME》と称された裁く者による裁かれる者同士を闘わせるゲームが行われていた。闇の王となった少年を取り戻すため、闇の奴隷になった少女は立ち向かう事を決意する

プロローグ

『闇のGAMEを始めようか』

「闇よ、僕が餌を与えてやるぞ……この退屈を晴らそう」

“望みは？”

「高林 天宮」

まず学校が闇に狩られた

闇に喰われ、外からも中からも何も見えなくなった

「僕にひれ伏して助けを求めたらいい……僕は主人、君は奴隷。

分かるかい？天宮」

「私は絶対、竜義にだけは助けを求めたりしない！それで闇に飲まれたとしても！！」

闇の王となった少年、闇の奴隷となった少女

二人の戦いは異変と共に静かに幕が上がる

そして、それを傍観する一人の少年と、感情に振り回されるもう一人の少女

……彼らもまた闇に囚われた哀れな者達

3年前…

前日の豪雨で増水した川は濁流となり、流れも速かった

「たすっ…ぐ…りゅ…はっ」

「早く掴まって!!」

飲み込まれた少女は、かろうじて瓦礫に掴まり、流されるのを免れていた

一緒にいた子供達が焦った様子で駆け出していく

「助け呼んでくるッ」

「りゅ…ッ」

「手を出して！」

助けようと少年が岸に手を掛け、もう片方の手を伸ばして叫んでいた

「早く手を伸ばすんだよ！…うわっ……ッ」

しかし一瞬バランスを崩し自分も落ちそうになり、何とか堪えた

でもそれを見た相手は…

「っ…」

必死に伸ばしかけた手を引っ込めてしまったのだ

「???！ 何やって…っ」

「いらな… はうッ、っ…」

「え?!何っ…早くッ!！」

「いらないッ…… うっ…」

「え?!！」

「竜義の助けなんて必要ないッ！ ……きゃっ」

叫んだ途端、体が濁流に呑み込まれ姿が消えた

「！ ツ……………天宮あッ！！」

現在…

昼休みの屋上に二人の男子生徒

「マジ、やんの？」

「」

「うわ、無視だよ……………」

良いけどさ別に。でも後悔すんのはお前じゃない、アイツなんだぜ
「？」

気にした風もなく、更に諭した。相手からの返事は無かったが僅かな反応を見る

「諦めちまつかもよ？」

追い打ちを掛けるように加えた一言

「諦める性格なら、事は簡単だった。アイツは決して折れたりはない」

やっと口を開けばそれは絶対な断言。淡々と呟かれる

言った本人も溜め息を吐いて同意するところを見ると話題の人物を熟知している様子だった

「ま！そーだわな……いつそ放棄してくれたら楽だったのになぁ？
アイツは単純なお前は無器用だねー」

「
」

「（まーたムシかい。いい加減慣れたケドね）……まあ無理だろー
な。でも3年前の事に振り回されているのは果たしてアイツなのか
な？」

その視線を受けると、何が言いたい？と言わんばかりに睨まれる

それを見て肩を竦め、踵を返した

「まあ頑張れや！王ーさま」

「
」

その日は雲一つ無い青空

「あー良い天気だ！」

プロローグ(後書き)

痛いです

闇の目醒め

9月30日

いつものようないつもの日常…放課後

この日、明穂小学校には、まだ時間潰しをしたり、倶楽部・スポーツ少年団などで、生徒や教師そして、近日行われる学祭の企画の話し合いの為に6学年の生徒全員が残っていた

「ではクラス会は以上の事を考慮して行ないます。くれぐれも協調性を乱す行動は控えて下さい。

……以上で終わります」

児童会長であり6年4組学級委員長を務める

『島中 竜義』

彼は小学生とは思えぬ雰囲気を持っていて、教師でさえやり込めてしまうところがあった

整った容姿と優秀な頭脳、運動神経が良くて金持ちと理想的な環境の彼には同じクラスに血の繋がらない同い年の姉がいる

黒板に書いたものを写す彼女、副委員長を務める

『島中 真代』

長い髪をポニーテールにした美少女で、彼女もまた小学生にしては異質で沈着冷静を絵に描いた様な優等生だった

そして、この二人の幼馴染み

彼らも別の意味で目立つ人物達で

『高林 天宮』

『片野 拓也』

天宮は前向きで明るく表情豊かな少女。

目を引く容姿ではないが愛らしく腰まで垂らした長い髪をツインテールにして青いリボンで結んでいる

クラスの中心になってしまっくらい存在感が強く、時には彼女の意見は竜義を凌ぐ事さえあった

そして拓也もまた然り

一見軽そうにしているが、スポーツは万能で実は頭も良い。積極的に活動する事は滅多に無く、大体は突っ走り気味の天宮のストツパ一役だが、その意見はいつも正しい道に導く為、一目置かれていた
(面倒くさがりが玉の傷)

悪童顔は真面目にすればさぞ整っている

3年前まではいつも4人一緒に行動し笑っていた

……しかしある事件以降、4人は4人ではなくなっていた

先に離れたのは竜義。

そして真代が付いていく

それを繋ぎ止めようとする天宮を制したのは拓也だった

(楽しみだなあ 学祭……ね？なんか外暗くなってきた……えッ？)

帰り支度を始める中、ふと外の異変に気が付いて声を上げる天宮

「外、ヘンっ!!」

皆がおかしなコメントに注目した

「何言ってるんだ？」と呟きつつ、つられる様にして窓の外に目を向けて絶句する

学校の敷地を囲うようにして広がっている漆黒色の霧

運動場までは何も無いのに校門を隔てた外側が何も見えないくらいの『黒』一色なのだ

運動場にいた生徒達も動揺を隠せない様で、校舎に行く者。混乱し

て残っている者。それぞれだ

しかし異常には気が付いているのか誰も校門の外、つまり霧には近づかなかった

勿論、教室にいた者達は窓にへばり付いたまま動けない

しかし動揺する生徒達の中動じない者がいた

「
」

竜義と真代は無表情のまま並ぶ

「見事に真っ黒だなあ」

そして能天気には呟く拓也の横で、天宮は不安な面持ちだった

胸騒ぎがする

焦っているのは生徒以上に職員達だった。臨時放送が入り、残っている生徒は各教室に待機、職員は緊急会議が開かれた

「間、どんどん濃くなってない？」

「毎日通ってる通学路だけ？前が見えなくなつて家に帰れるさ」

「だ、だよな！ただの霧だろ?!」

それを切っ掛けにクラスが騒然となり始める

「でも白くないよ?」

霧本来の彩を天宮が静かに指摘する

拓也と真代、そして竜義が視線のみを向けた

……が、気が大きくなった生徒達は次々に勝手な行動に移りだす

「大丈夫だって！帰ろうぜ!!」

煽る者

「先公なんて待つてられつかよ!」

反発する者

「ねえ、校門までは霧無いじゃん！行ってみない?」

好奇心。むしろそれが不思議な事に気が付いていない

「ちよつ、待つて！待機つて言われてたじゃん！怒られるよつ」

焦って制止する天宮の声を聞く者はない

拓也が

「放っておけ」と投げ掛けたが天宮の性格上、見過ごせなかった

この謂われもない不安は何なのか、自覚は無い

(無意識に警戒してるんだな、さすが天宮)

天宮はそれでも何とかしようとする確実に皆を制止できるであろう人物
を目で捜す

「りゅっ、ぎ？……はえ？(いない……)」

先程まで居たはずの姿が今は無い

「」

拓也から表情が消える。何か感じているのか？

(やーっぱ、やるんだな……仕方ない事だとは思っケド天宮を納得
はさせられないぞ?)

「拓也、竜義がいない」

天宮が拓也の裾を取り、注意を引く

「ンー？島中姉もいないぜ？とつくに」

答えた時にはいつもの愛想の良い穏やかな表情に戻っていて何食わ
ぬ顔

「えッ」

天宮は目を剥いて拓也の言葉を確かめる様に教室を見回した

二人の存在は無い

(いつの間に……)

でも心配はしていない。あの二人に限って無謀な行動は起こさないと知っているから

しかし、闇の鼓動が脈打ち始めた事、そして竜義に起きている異変に天宮はまだ気が付いていない
「どうしたと言うんだ？」

緊迫感に包まれている職員室

1人の職員が蒼白な表情で受話器を持ったまま立たずんでいた

「電話だけじゃなく携帯やインターネット、とにかく外部の通信機器の全てが効かなくなるなんて……」

「コンピュータは正常に活動してます。電気も正常なのにテレビは映らない」

「こんな事、在り得ないだろう？」

その頃、学外では？

「見てください！明穂小学校を突如襲った謎の黒い霧！！一体この現象は何なのでしょうか?!」

テレビリポーターが興奮して話している周りで、野次馬が群がっていた

「その中には未だ100名近くの生徒が閉じ込められているとの情報です。私達以外の報道関係者、そして学校に閉じ込められた親族の方々が続々集まっているようです」

「専門家によると、この霧は自然現象では在り得ず、このような集まりを見せるモノは異常とのこと。しかし性質も不明で、まだ誰も中には突入していません」

おかしな事に内側と外側では霧の状況に矛盾が生じていた

内側から見た霧は校門の外に渦巻いているのに、外側からだ校門の内側に霧が溜まって敷地を包んだ状態になっているのだ

勿論互いに状況を知らないのです、その矛盾に気が付いている者はない
一部を除いて

「外はどうなっているのかな？」

「ねえっ 先生が外に出てるよ！門の外行っちゃった!!」

その声に、再び窓にへばり付いた生徒達の視線の先、3・4人の職員が霧の中に消えて行く

見守る全員

……
ザワツ

数分経つても、行った者が帰ってくる様子がない

「ねえ遅くない？」

痺れを切らしたのは外の者達も同様だったらしい

一緒に来て残っていた職員が、彼らの命綱を引き始めた……が、その先は千切れていた

「
」

その時の職員達の動揺は見て取れた

「何あれ？いないじゃん。どうなったわけ？？」

「先生どうしちゃったの?!」

「そ、外に出られたんだろ？」

「やだっ！いなくなっただけじゃないよね?!」

最初のうちは、子供独特の習性から好奇心が先立っていたものの、

流石に不安と恐怖に駆られ始めてきた様だ

既にパニック状態の生徒達を制止するには限界だった

「だからダメだつてば！」

入り口を立ち塞いで皆を諫める天宮を、生徒達は口々に反論した

「だつておかしいだろ?!」

「行った人が帰らないなんて変よ！」

「邪魔すんなつて！高林だつて黙つて待つてて無事でいられる保証はないだろつ？なら無責任に止めるなよ！」

天宮も困つてしまう

「う……で、でもつ……だからこそ危険かもしれないのに?!」

(あれまあ困り果てちゃつて……こういつ時の雑用係(委員長)様はドーコ行つてンのかね)

傍観を決め込んでいた拓也の視線の先、天宮の塞いでいた教室のドアが外側から開かれた

皆が一瞬沈黙し、視線が集中する

天宮もゆっくり振り返つた

「竜……」

「何、騒いでるの？放送を聞いていなかったのか？教室に待機していろと言われたらどう？煩わせないでくれないか？」

天宮の背後には竜義が静かな表情で立っていた

この何とも言えぬ威圧感に、騒いでいた連中は緊張で固まる

そんな中、拓也が飄々と前に出た

「お前ねえ、この忙しい時にドコ行ってン？むしろお前の行動が今のセリフに矛盾してるだろ？」

天宮を手伝いもしなかった拓也が文句を言うのもなんだが、思っても竜義相手に暴言を吐けるとしたら天宮と、この拓也くらいである
「職員室に現状の報告を伝えてきたのよ。各クラスに誰が残っているのか把握しておく為に」

竜義の後ろから答えた真代に、拓也は
「なーるほど」と納得した

「それと全員体育館に集合だそうだ」

竜義の言葉に皆が一瞬目を見張る

あまりに唐突な事に皆が困惑した

「は？」

拓也など呆れた様に呟く

「お前えー、煩わせるなって脅しておいてさ……先言えよ。皆、戸惑っちゃうだろ？」

「とにかく体育館に移動してくれ」

竜義はあくまで淡々とした態度を変えないままだった

（わっがままあ）

これは天宮と拓也の意見改ページ

校舎に残っている生徒・教師、全て体育館に集められた

「落ち着いて聞いてください。現在、霧については何も分からない状態です。だから不容易に霧の中は突破できません。外からの救助を待ちます。決して校舎から出ないように」

校長が持つマイクの手は震え、表情も強張っていた。他の職員も緊張し、顔をしかめて蒼くなっている

（やっぱり霧に入った先生達は居ない。帰ってきてないんだよね……）

ブルッ……

天宮は回りを見ながら自分が見たあの光景を思い出して震えた

千切れた縄。戻らなかった教師達。変わらぬ闇……

校長の話には居なくなった教師達の話は一切出てこない

(なんで隠すの?)

益々不安は煽られた

「やっぱ帰れないンじゃん!」

「救助ってそんなにヤバイの?!」

「夕飯は!?!」

「オレ塾あるのにつ」

「んな事、言ってる場合か?!」

次々に不満の声が上がって騒然となる中、教師達はそれを制す者、宥める者、泣き出す者と様々だ

(結局、生徒と変わらないって事だよな。しょせん同じ人間 不安は誤魔化せない)

そう言っただけ口元を緩ませたのは?

そんな中、静かに壇上に上がって来る1人の生徒

誰もがその姿を目で追う

ザワめきは別のモノへと変わった

(竜義?)

戸惑っている校長を尻目に島中竜義はニコリと笑って、持っているマイクを丁寧に奪い、生徒達に向き直る

校長も唾然として、成されるままにマイクを渡してしまい竜義の横顔をマジマジ見つめた

素直に従ってしまったのは恐らく竜義から醸し出される有無言わせぬ雰囲気圧倒された為

皆が目目する中、動じた様子もなく竜義は口を開いた

その堂々たる姿はまさに上に立つ者の貫禄を身に纏っている

……否、威圧感か?

「お静かに。これからゲームが始まります」

「ゲーム?」

「こんな時に?」

(竜義?……何言ってるの?)

天宮を含め彼の言動に当惑する

「島中、何を言ってるんだ?」

教師達も動揺している

だが止めるに至らなかったのは、相手が竜義であったからだろう

「簡単な事ですよ。」

裁きを与える（裁く者）と裁きを受ける（裁かれる者）2つの種に分かれ退屈を凌ぐんですよ」

言われている事が理解できなかった

（退屈凌ぎ??）

天宮も訳が分からないと混乱する

「何バカな事を！」

「こんな時にふざけるのも大概にしなさい！」

流石に怒りが飛ぶが、竜義は態度を変える様子もない

むしろ無視して話を進めていく

「これからのゲームについて強制参加してもらおう」

一瞬、壇上の竜義と目が合った気がしたのは気のせいかな？

「強制？」

「なお、裁く者のメンバーはこちらで勝手に選ばせてもらった」

(えっ、そーなの?!)

「いつの間に」と思案中、周囲の様子に違和感を持つ

みんな……?

何故か天宮と拓也を除いた6年4組の生徒達がぞろぞろと竜義のいる壇上へ上がって行くのだ

「へっ?!えっ…あ、み、みんな?!…な、何、どうしちゃったの?!?!」

慌てる天宮の声に誰も答ええない

天宮にだけじゃない。他の声にさえ反応しなかった

この疑問を竜義が解決してくれた

「彼らは、裁く者の契約者になった。闇によって決定された選ばれし者だ。

そして、突然ですが……先生方、アナタたちの教育方針とは何なのか?」

「何?」

突然の質問

応えるより先、竜義が続ける

「そして、それが僕達にどれほどの利益をもたらすのか?」

「利益？」

教員達は狼狽えるばかりだ

「ストレスだけを与えられても困るんですよ、期待は重圧しか生まない。理想は絶望を育てていく。そんな物は望んでいません。アタタたちの役目は今現在を以て剥奪します」

ゆっくりと細められていく目

「ごきげんよう、先生… さあ…」

竜義から薄笑いが浮かんだ

それは天使の笑顔の……悪魔

「やべっ」

(なにが起きるの?)

状況が把握できない天宮は惚けていた

その手を、珍しく慌てた様子の拓也が握って怒鳴らんばかりに天宮の名を呼ぶ。今迄にない位に真剣な表情で

「天宮ッ 走れ!!」

「へ?」

従うより先、拓也によって体は引っ張られ出口に向かわされていた

困惑する天宮

「どっ、どして…」

なされるがまま引っ張られながら聞くと、前を走る拓也が叫んだ

「闇に喰われるからだよッ!」

思いもよらぬ返答に天宮は目を丸くした

その時、背後で聞こえた…

「『さあ、闇のGAMEを始めようか……』」

竜義の静かな声が頭の奥まで響いた

これが合図

ドクンッ!!

「え…」

次の瞬間、振り返って視界に見たモノ

ソレハ……

「ぎゃあああああつ」

「たッ、たすけ……ひいいい!!?」

「な、に……」

体育館を飛び出しても拓也は脚を停めない

「拓也!!!止まってよッ!皆が……みんなが!!」

天宮は動揺しながら叫んだが拓也は従わない

「今は忘れる!巻き込まれるっ」

「何に?!なんでっ」

天宮は訳が分からないと叫びながら改めて振り返る

自分達の後ろからは同じように間髪一髪で逃れた生徒達が必死の形相

で駆けて来ていた

そして逃げ遅れた者達は、行く手を阻まれ次々に体育館内で闇に飲み込まれていく

幾つもの叫びだけが、未だ響き続けていた

視界の中の闇は、体育館内を覆い尽くして

悲鳴だけがこだまする

「た、拓也!!」

恐怖で声を震わせる

「聞くなッ……今は走れ!」

先頭を走る天宮達はそのま別棟の教室までやってきていた

壇上を除いた体育館内は闇に包まれ、何人も人間が消えた中、平然とした竜義達

むしろ愉快そうに見えた

「竜義様、片野拓也は裁く者では?」

真代が疑問を投げ掛けると竜義は細く笑んだ

「ああ。流石、片野か……うまくいかない。
でもシナリオ通りだ、問題ないよ。彼らがあちら側でなければ面白
味に欠ける。さあ邪魔者は片付いた、そろそろ行こうか」

「ハア…ハア」

天宮は息を整えるので精一杯なのに一緒に走っていたはずの拓也は
息の乱れすらない

「ま、ココまでくれば食事には巻き込まれる心配はなーし！」

拓也は天宮の手を解放して体育館が見える窓を覗いた

外観的には変哲ないその中で行われていた恐怖の洗礼

拓也はドコまで識っていたのか？

「た、たく…や？」

拓也はおもむろに振り返って天宮より先を見る

「アイツが来る」

「？」

天宮はつられて体を起こしながら振り向くが、いるのは一緒に逃げ
てきた生徒達だ

(いない、よ?)

同じ様に息を乱して膝を着いている者、震える者、泣く者

拓也は生き残った(?)者達の確認をする

(裁く者はオレと天宮以外の4組連中。

そして生き残りは、幸い体育館の入り口付近にいた6学年だけか。運が無かったな……

ンで教師で残れたのは湯川か。あの島中がよく大人を見逃したもんだ)

唯一の職員

『湯川 洋一郎』(24)

養護教諭、中肉中背のハンサムで女子に人気があり穏やかな性格でかなり生徒の信頼もあつた人物だ

拓也は洋一郎に近づき、暫く会話をする

会話するにつれ、拓也は少し驚いた風に見張った

その様子を見ながら天宮は別の事を考えていた

(霧が学校を包んでからおかしくなった。真代も拓也だって……そして)

「ひゃっつ?!」

突如、背後から伸びてきた腕に羽交い締めになれ、天宮から間抜け

な悲鳴が上がる

「高林っ?!」

声に驚いたのは洋一郎だけで、拓也は天宮の方を見直して平然とした様子で腕を組む

「掃除、終わった?早い到着だな」

視線は、天宮と羽交い締めする人物も越えた所へ、向けられている

「… 島中」

びくんっ

拓也から告げられた名前に反応したのは天宮

近づいてくる足音。そして三人の前で立ち止まる

「竜義!」

思わず、姿を認めるなり怒りが込み上げ、その名を叫んでいた。本当なら飛び掛かりたい衝動もあったが、しっかり捕まえられていて適わない

ジッと見つめてくる視線は拓也を無視した

「逃げられるとも思っの?……天宮」

冷ややかな視線を向けた竜義に、すかさず反論する

「竜義からは逃げた覚え無いもんツ！ 竜義おかしいつ！真代も皆も！！」

こんな状況でソレだけ憎まれ口を叩ける度胸は大したものだが、本人には全くダメージが当てられている様子は無い

（考え無しなトコは、いつそ清々しいなあ 天宮は）

そんな事を思いながら、二人の間に割り込む拓也

「てつきりピカピカに一掃しちまう気なのかと思ったんだけどー？ゲームするつもりあったワケ？逃げ遅れたなら容赦なく喰わせるつもりだったろ？」

「クス… どうせ君が動くことは想定範囲だ。最低人数くらい生かしてくれると信じていたよ？」

「それを一般に、他力本願っつーんだヨ」

淡々と交わされていく会話

「ケホっ ……い、っ……」

そこに締め付ける力が強かったのか、痛みに顔を歪める天宮に気が付いた

「放してやったら？」

拓也は竜義に向かつて提案する

主犯を熟知している証拠

「……離してやれ。」

片野、あまり調子に乗るな。どうやって闇の選定から逃れたかはともかく、いつだって僕の意志で闇に下せるのだから」

途端に不機嫌になった竜義の、射貫く様な視線を向けられても、飄々とした態度は変えない

「肝に銘じておきますよー」と苦笑いするのみ

「」

天宮は解放されて洋一郎に庇われる様にして腕の中に滑り込む

「竜義がやってるの？」

「ああ。聞いての通り」

質問にオウム返しに頷く拓也

天宮は改めて竜義を睨み据える

「竜義……」

「天宮、僕はいつも考えていたんだ。人間の傲慢と無意味な存在。見直すべきだったのさ」

「？」

一般の小学生レベルの天宮には理解できる内容ではなかった

「つまり何をやる？」

洋一郎の声にも僅かな憤りが見えた

「……人間狩り」

「ッ」

「馬鹿げてる！」

そこに怒鳴ったのは、解ってないはずの天宮

「」

でもソレを無視し、竜義は拓也に向き直る

「片野、君が一番理解があるようだから伝えておこつか。闇から各々に武器を与える。それまで解散だ」

「武器は？」

「……すぐ届く」

そう言って竜義は、幾人かの取り巻きと共に姿を消した

竜義が消えて、茫然と立ち尽くす彼ら

「！」

不意に『ナニ』かに気付いて自分の手を覗く

「コレなに？」

闇色の球体。それは天宮の物で、見渡せばここに居る者達全員に同じ色の異なる物が握られていた

困惑してる様子から、天宮のようにいつの間にか現れた代物らしい短剣だったり、長剣だったり、いかにも武器といった物がほとんど

「コレで何するの？」

武器と言うには頼り無さすぎる自身の球を見つめながら、拓也へ近寄った

「ゲームだろ？」

拓也は闇色の十字架のネックレスにキスをして、見上げる

拓也の物も武器と言うには程遠い代物で……

「拓也はどこまで知ってるの？」

流石に鈍い天宮でも拓也の違和感には気が付いた

竜義と対等に話をして、先を見透かしている様な余裕の態度、言動

何カヲ知ッテイル

でも拓也は微さく笑っただけで応えなかった

(はぐらかした)

教室内には自分たちに与えられたそれぞれの武器を見せ合う者

まだ状況を深刻には考えていないのだろう

泣きじゃくっている者

混乱して思考がついていかない

怒る者

上に同じ

武器に恐怖

現実逃避

まとめられない状況で、洋一郎が何人かの生徒に囲まれて宥めている

「帰れるよね？」と言つ言葉に、不容易に頷く事はできなくて、困

った笑顔を向けている

不安にさせたくなくても無責任な事は言えない。洋一郎の生真面目さが見えるようだった

（優しいっつーよりは、お人好しだねー 先生え）

拓也は闇に侵されていない周辺をトコトコ歩き回り、何かを確認するかの様に窓や壁を叩いたり、入れる教室に向かったりしては洋一郎へ話し掛けていた

忙しそうに考えながらも行動に制限はない

止める洋一郎や拓也を振り切って、闇に我慢できなくなった者達、数名が逃げ出した

勿論、戻って来るはずも無く、後を追うようにまた数名が廊下に飛び出したが、今度は、拓也は止めなかった

その代わり、よく通る声で告げる

「行きたいなら行け、ただし保障はしない。ここは既に学校であつてそつでない別の空間に支配されている。見る」

落ち着き払った様子で皆を促すと、横の教室の扉を開け放つ

皆が驚愕した

中は見知った教室では無く、混沌とした歪んだ空間。闇がマーブル状に渦を巻いていた

恐怖で息を飲み込む生徒達、と天宮

「このように不容易に近づいたり侵入したりすると闇に食い殺されるぜ？それでも良いなら、どうぞお好きに」

「無事な空間もあるけど」と加えたがそれ以上勝手な行動を起こす者は無かった

また教室に缶詰

ただ拓也は、相変わらずジツとしていない

そこへ天宮が話し掛けてきた

「拓也、コレも竜義がやってるの？」

不安な表情で横に並ぶ天宮に苦笑いが漏れた

「ああ」と頷いて、頭を撫でてやる

「アイツは支配者だかなあ、思うがまだまだ。アイツが許可すれば校庭だって出れるよ」

「武器みたいの渡して……何がやりたいの？」

「天宮やオレのは形が異なってるよな？お世辞にも武器とは言えない」

とネックレスに触れ、天宮の球を見る

天宮はにわか、仏頂面をして球を見つめた

「私、剣や鉄砲みたいに人を傷つけそうなのはいらない」

「ソレ使い方は？」

「なんとなく分かるの、不思議だね」

本人だけは自武器の扱いが把握できるようになっている

つまり、逆を言うなら他人の武器は扱えないという事だ

(よくできてら、ついでにこの武器じゃ裁く者には無効化されちまうんだろっしなあ)

闇の目醒め（後書き）

お前等幾つの設定だよ！…と言う厳しいツツコミは痛いので許してください

ルール

次に呼び出された時は夜中だった

突然、映らなかつたテレビ画面に浮き上がる文字

《25時 体育館へ》

簡潔な一行分

皆、騒然となったが、応じたのは洋一郎と拓也、そして天宮だけだ

「時計が無かつたら夜なんだか朝なんだか分かんないね」

「体内時計も狂うからな。でも不思議と腹は減らない」

体育館へ続く廊下で三人の声だけが響く

「無理して来なくても良かったんだぜ？ホントは怖いくせに」

「！」

おもむろに言われ、驚いて顔を上げる天宮

拓也と目が合った

洋一郎は黙って、後ろの会話を聞きながら歩き続ける

「なんで?」

「分からないでか 何年付き合ってると思ってんの? 島中に会う事も、今の状況も、怖くて仕方ないくせに」

凶星を言い当てられ、気まずそうにして拓也の裾を取り、口を開く

「竜義は変わったの?」

「ソレを確かめたくて付いてきたの?」

すかさず、聞き返されて僅かにたじろぐ

「」

答えられなかった

そうこうしている内に目的地に来て、重い扉を洋一郎が引く

絶句した

拓也でさえも目を見張ってしまっ

「な……んじゃ、」

館内は見る影もなく、ドーム状のコロシウムが設けられていた

周囲は観覧席ギャラリーが設置され何処からでも、中央の舞台上が見渡せるよ
うだ

東京ドーム位の面積がすっぽり体育館内に収まっている謎に思考が
着いていけない

「せつ、先生。ココ、体育館……だよな？」

啞然として洋一郎の手を握る天宮に、自分も混乱して応えられない
拓也だけは、いち早く我を取り戻し周囲を観察する

ギャラリーには「裁く者」が、座ってこちらを見下ろしている

「天宮」

不意に拓也が天宮に耳打ちして、ある一定の場所を視線で指し示した
釣られるように視線を向け、緊張する

（竜義！！）

丁度入り口から真つ正面のギャラリーが、ガラス張りの個室になっ
ており、さしずめVIP席という所か

目的の人物が其処にいた……

「竜義……真代……」

脚を組み、一人掛けの白いソファに腰掛けて、見下す様な冷たい視線を向けている竜義と、傍らに立つ真代

「これは×2、凄いセットにビックリだ」

平然と言い放つ拓也に周囲からバツシングが飛ぶ

竜義に対しての無礼な態度を説いたものが主な内容だった

（お厚い信仰心なこと）

拓也は、動じた様子も無く肩を竦めたのみで天宮に手招きする

天宮もブーイングの中、ソロソロと拓也の側に行く

「島中、招待した割には随分な歓迎じゃないか」

すると真代がマイクを取る

「静まりなさい、貴方達」

一喝され、一気にギャラリイは静まり返り再び沈黙へ包まれた。細く通る声の威圧に、誰も逆らわない

（さーすが 良く手懐けてあるな）

感嘆を漏らしながらも、呆れた風にも見えた

「他の奴らはどうした？」

今度は竜義が口を開くと、天宮の表情が心なし歪んだ

拓也はあっけらかんと

「来ないよ」と言い放つ

「来るワケ無いっシヨ？現実離れし過ぎた空想に付き合っちゃくれないよ！招待には『全員』とは書いてなかったし？」

拳げ足を取るような態度に真代が紅潮する

「なっ、口を慎みなさい！！片野拓也！」

「構わない。黙っていてくれ、真代」

それを逆に竜義が制し、真代も渋々引き下がる

「片野、君で充分だ。これからゲームのルールを説明する」

「！」

「あいよ」

拓也だけが平静な態度を変えぬまま、話が進んでいく

「ゲーム内容はバトル形式で行なってもらっ

「対戦相手は？」

「こちらから、追って連絡するよ」

淡々と交わされていく会話

「時間は無制限。相手を気絶、もしくは……殺せば試合は終了となる」

「ちょっと待ってっ！！」

聞き捨てならない単語を耳にして、慌てる天宮は会話に割って入ると、竜義の視線がこちらを見た

「殺すって……どういう事?! 殺し合いじゃない!」

「そっだよ、殺し合いだ」

アッサリ肯定する竜義の冷静さに、絶望する

「……に、ソレ」

「死ねば闇が食らって死体は片付けてくれる。気絶した場合も、生きる見込みが無い者に対しては闇の餌になってもらっ」

「つまり……気絶、仮死状態の場合は闇には飲まれない? って事？」

拓也も相変わらずの態度で会話を進めていく

「ああ」

それを見ていて、天宮から一筋の涙が伝う

「な、にソレ… 何それッ！全然解んない！

急にこんな事になっっちゃうなんておかしいよ！殺すとかシャレにならない事、簡単に言わないでよッッ！！」

興奮して、怒りと涙で紅潮していく顔を今は構ってられなかった

止められない感情

「 尚、相手を庇い、わざと敗北を望む様な事があれば、こちら側が判断したと同時に、庇われた者を闇に喰わせる。これについては否応無しに受理する」

天宮を無視して平静な態度を崩さぬまま、竜義の説明は続いた

息を乱すほどの訴えすら相手にされなかった天宮は、愕然と目を見張る

傍らに洋一郎が肩を抱いてくれたがショックは拭えない

(どっして……?)

「片野、期待しているよ。……それと…」

竜義の視線が、拓也から天宮に移動し、その姿を捉えると……

「えっ」

おもむろに天宮の身体が宙に浮く

「えええつつ?!」

狼狽える天宮に、表情を強張らせる洋一郎と、流石に顔色を変えた拓也

何かを察したのだろう。

咄嗟に天宮に腕を伸ばしたが…

一瞬の差で、竜義が口を開く方が早かった

「目障りだよ……」

次の瞬間

「?! キヤ…っ」

バンツッ!!

「ツツ ……フグツ…!! う ……あ ……はア …… あ、うっ…」

天宮の身体は、勢いよく壁に飛ばされ叩きつけられた

叫ぶ余裕も無く、小さく呻いてズルズルと壁から床に落ち蹲る天宮に、二人は驚愕し慌てて駆け寄った

「天宮!」

「高林ツ!!」

竜義は無関心に立ち去ろうと背を向けた時、天宮を伺っていた拓也がゆっくり立ち上がり、静かにその背を呼び止めた

「なあ？コレはお前のシナリオ通り？」

竜義はチラツと振り返り、ニヤリと整った表情を綻ばせる

「……でなければ今、君達は此処にいないだろう？」

「お休み」と告げて、今度こそ竜義は立ち去って行き、真代も黙って後に続いた

同時に、^{「ロシム」}体育館内のギャラリ―共々闇に包まれ、気が付くと三人を残していつもの光景に戻っていた

「ま、幻？」

動揺しながら辺りを見回す洋一郎に、拓也は肩を竦めて見せただけ

「天宮、無事か？……ケガは？」

洋一郎が介抱している天宮を、覗きながら尋ねてみたが本人はグツタリとしたまま気を失っている

「骨に、は……異常無さそうだ。それに私の能力もある」

洋一郎は腕の中の天宮を見下ろしながら、自分の右手首の黒いブレスレットを見つめた

「能力？」

拓也は訝しげに首を傾げて洋一郎の右手を取り、
「何ができるの？」と聞いた

ニコリと笑った洋一郎はその手を、天宮の腹の上辺りにかざす

「なになに ヒーリング?!俺、初めて見た」

大抵の人間が初めて経験、目にする事だろう

興味津々な拓也に洋一郎は呆れる

「よく言う。これは裁く者には特殊能力として備わってるモノだ。
知っているくせに……」

拓也は肩を竦めただけ

「センスは、裁かれる者のはずだけど？」

理解していてわざとらしい質問に、非難めいた視線を送る

「このブレスレットから発される治癒は相当なものだが、私に与えられた理由を考えると複雑だな」

「あ、何だ 知ってたんじゃないん」

拓也は意外そうに洋一郎を見返した

洋一郎も拓也を見てから、ムスツと顔をしかめて言う

「お前……色々質問しておきながら全部把握しているじゃないか。もしかしたら高林が傷付く前に対応できたんじゃない……」

洋一郎の疑惑の眼差しは怒りを含み、拓也を睨み据えた

拓也は慌てた様子も無く首を左右に振って

「とんでもない」と否定する

「んな怖い顔しないでえん　いくらオレでも天宮の攻撃は不意討ちだったし」

ふざけるのを半分に抑え、

「為す術なし！」と苦笑いして言い訳する

洋一郎は責めるだけ無駄と諦めて、話題を戻した

「闇の力を作り出せる王か……とんでもないな」

うんざり肩を落とす洋一郎に拓也は、その肩に腕を回し

「まあまあ」と慰める(?)

手を払い除けながら、改めて拓也に疲れ切った顔を上げる

「お前、悠長に構えている場合じゃないぞ？今後犠牲者は増加する。確実に！」

私の力は、怪我を負った者を回復して再び試合に参加可能にする為の根回しだ」

「うん、予想はしてた」

やけにアツサリ肯定して頷き、

「よっこらしょ」とジジ臭い掛け声で立ち上がり話を続ける

「センスはゲームに直接参加はしない。ならナンデ残されたのか？」

淡々と語る内容が容易に想像がついて、洋一郎は険しい表情を隠すように俯き、腕の中の天宮を見つめながら拓也の言葉を聞いた

居心地が悪い

「闇の裁く者が何度でも酔狂なゲームを楽しむ為のパーツ。いわばオモチャの修理屋、オレたちの医者ってワケだな。

全部死ぬわけじゃない。しかし怪我を負ったままではいつかは闇に消える。

裁かれる者がいなくなる事、〃（イコール）ゲームプレイヤーがいなくなり成立しなくなる日が訪れるのは、時間の問題。それを少しでも永くさせる手立て……それが先生の存在理由。愉しみが無くなるのは困るモンなあ」

皮肉めいた視線は良いものではなく、むしろ気まずかった

洋一郎が渋々顔を上げる

「治療は怪我をさせる為の登竜門ってトコだね」

目が合った拓也は、いつもの空気に戻って相変わらずの態度でおどけていた

「治療したくなくなるよ」

…溜め息

拓也は全開で笑い飛ばす。

「無理ムリ！」と指を振ってみせた

「気の滅入る事言わないでよ。どーせ怪我人を目の前にして放っておける性格じゃないじゃん」

視線の先は天宮

「現に説得力ないしい」

ニヤニヤして皮肉る声に、洋一郎は何も言えなくなった

凶星だ

「悪い事じゃないし落ち込むトコじゃないでショ？むしろ良いセンセ！（笑）」

拓也に言われても複雑なだけ

その心境を察してか、拓也はもう一度しゃがんで天宮の頬に静かに触れる

「……誉め言葉だよ。そんなんだから島中は先生を選んだんだ。適格者であり……オレに近い存在の持ち主だから」

天宮を見つめる瞳はひどく優しく

「片野」

『近い存在』

それが何なのか、当人同士は理解し合っている

洋一郎も黙って聞いているしなくて

と……それが不意にこちらを振り向く

動揺して目を泳がす洋一郎に拓也は、気にした風もなく告げた

「仕方ないっショ？センセは保健の先生なんだから ケガ直すの仕事だし」

至極当然の言葉に呆れ、話題を変えた

「島中はどこまで闇を把握してるんだ？」

洋一郎の質問に拓也は目を細めた

「なんでオレに聞くの？」

「お前に言わなきゃ誰に聞くんだ？」

裁く者に武器を与え、学校を闇で孤立させた。相当な労力だろう？

……私だってブレスレットの補助があっても結構疲れるのに、あいつは使い放題だ」

「だから奴は王サマなんだって」

拓也はげんなりした様子だった

「まあ、そうなんだけど。ただ島中の力は巨大だから比較にならないだろうが。」

私が言いたいのはつまり、その選定から逃れ、裁く者の権利を放棄してしまえる片野は、裁く者以上の力があるんじゃないのか？」

洋一郎の視線が探りを入れてくる

しかし、拓也は一瞬だけ目を見張っただけでクスリと嗤う

「さあってね」

(はぐらかすか…)

洋一郎は拓也の反応からこれ以上の詮索を諦める

そうこうしてる内に、天宮の治療を終え、彼女の体を抱えたまま立ち上がって歩き出す

拓也が質問した

「終わったの？」

「保健室に連れて行く。道は通じてくれるだろう？」

「ふーん……オレも行く」

保健室に着くと、ソコにはすでに先客がいた

「なんだ？お前」

先に入った拓也の声に、天宮を背負った洋一郎は訝しげにヒョイツと顔を覗かせ驚愕する

「?!」

目を見張った次の瞬間、悲鳴を上げた

「うわあああっつ!」

天宮を落とさなかったただけマシか。ピョンと後に飛び退く姿はなんと情けなく、マヌケだった

振り返って一挙一動を眺めていた拓也の、呆れたような視線など気にしてられない様子で指を差す

「ねっ、猫!!ネコガツ……で、でかいぞ!!」

そうなのだ。保健室の先客は、通常より数倍でかい白い毛並みに赤い目の猫。

お座りしてこちらを見ていた

「デカイ、ツつっても虎よりちっこいジャン」

あくまで冷静な拓也の言葉に洋一郎は声を荒げる

「ひっ、比較がおかしいだろう?!」

普段、冷静な洋一郎の珍しい一面に拓也は察する

「。先生さあ、『ネコ』苦手なの?」

別に、からかうつもりは無く素直な感想を口にした

むしろ怯え方に同情すら覚える

「ッ」

一瞬、言葉を詰まらせたのが答えを示していた

図星

(やっぱり……)

拓也は、納得して深い溜め息を吐きながら改めて猫に向き直る

「真っ赤な目のネコなんていないッシヨ。お前何?」

動物相手に聞いたって、応えるはずは無い質問に、洋一郎も猫を恐る恐る見直してきた

「」

「…その上さあ……」

「いつ」

拓也の続く言葉に習うように、猫の背後で揺れる太くてバカ長い尾

拓也は肩を竦めて洋一郎を一瞥

「胴体より長い尻尾とデカイ耳、こんな猫いる？ついでに…」

「ワシは闇の造成物。」

お前らの監視と伝言を請け負う。以後、見知っておけ」

かなり偉そうな口調で告げたのは拓也ではない

「ぎゃあああつ！猫がしゃべったあああツ！！」

洋一郎の絶叫

「…ついでに、話もできる、ちょっぴりお利口なただのネコデスよ、セーンス」

拓也はニッコリしてみせた

目の前の猫モドキの生き物から発せられた声は案外かわいらしい

……じゃなくて

「な、な、なんでそんなに冷静に構えてられるんだ?!片野っ」

せつかくのハンサムな顔を思い切り歪め、天宮を抱え直して拓也を
問い詰める

「センセったら面白い顔させちゃってえ
まず世界は広いんだから受け入れなきゃー」

相変わらず受け流された

「からかうな!どこがタダの猫に見える?!お前が先に言ったんだ
ぞッ」

「えー、皆の憧れの保険医ともあろうお方が差別う?かわいいネコ
ちゃん、可哀想」

拓也はおどけてみせながら洋一郎をあしらった

「」

洋一郎もやっとならぶのか、諦めたように脱力

(だから猫じゃないっ…)

拓也は洋一郎で遊ぶのも飽きたのか、猫モドキ(?)に興味を戻す

「で?俺たちに用があるんシヨ?」

「当然だ。用があるからわざわざ来てやったのだ。有り難く思え」

「はは…」

(なんてふてぶてしい態度なんだ)

拓也は空笑いし、洋一郎は憮然とした表情を浮かべた

「GAME開始宣告だ」

その一言に、二人の空気が緊迫する

「さすがに目付きを変えたか。明日、午前10時に最初の試合を開始する」

「本気か?!こんな事、無意味だろうっ」

洋一郎が反発したが猫モドキは赤眼を細め尚も続ける

「選手は木ノ下^{キノシタ} 美紀^{ミキ}、そして…高林 天宮」

「!」

洋一郎の顔が引きつったが、拓也は冷静だった

「第一試合^{シヨッパナ}から天宮かよ。島中っては何考えてんだ？」

深刻性もなく平然と呟きながら、洋一郎の背中の天宮に視線を向ける

洋一郎も心配フアンそうに肩越しに天宮を振り返る

まるでこれからの事を予測しているかのよう

「ワシからこの事を伝えても良いが、お前から伝えた方が何かと都合が良いだろう」

と視線は洋一郎へ

ソレに対して拓也も何かを察したのか、洋一郎を見て納得した様に頷いた

当の本人は自分ヨウイチロウに視線が集中している事に気が付き、目を瞬くが無視された

「あーはいはい。オレから伝えてやるよ。」

ホントならお前が直に言った方が信憑性が高そうなんだけどね、事の重大さを自覚してねーようだし。でもこれ以上の混乱は勘弁だ」

つまり、そういう事なのだ

混乱は避けたい

ネコがしゃべる 充分異常だ

「この闇の中にいれば私生活に問題は無いはずだ」

おもむろに告げた猫（モドキ　しつこい）の言葉に、拓也と洋一郎は顔を見合わせる

「私生活？」

（充分、非日常に巻き込んでおいて、私生活も合ったもんじゃない気がするが）

と言つのが一般の意見

「闇の中にいる以上、特別な事でも無い限り、喉の渇きや空腹を感じることは無く、外部摂取を不要とする」

「そっいえばお腹減らないね」

「!?!」

洋一郎でも拓也でもない声が応え、一瞬二人は互いを見てから、揃って天宮に視線を向けた

洋一郎の肩越しに、ぱっちりとした双眸が開いて、猫をジッと見ていた

「天宮、いつから目を覚ましてたんだ？」

「んーとね…『ネコがしゃべったー!』ってト」

「大半じゃねーか……」

拓也はクシャクシャと頭を搔くと、肩を竦め呟いた

天宮は

「へへへ」と笑いながら洋一郎の背中から下ろしてもらおう

まだ覚束ない足取りだが、洋一郎に支えられながら足を着く

「大丈夫か？痛むところは？」

洋一郎に気遣われ、体を動かし

「大丈夫」と答え、猫を見下ろす

「私、天宮」

自己紹介のつもりなのか、しゃがんだ途端、名乗る天宮に猫の方が戸惑いを見せる

この奇妙な生物に対して臆することもない態度はある意味尊敬に値する

「知っている」

無然としながら猫は応えた

拓也は面白い物でも見る様に見物に至る

「だから私は天宮なの」

しつこく繰り返す天宮に、猫は困惑した

「だから知っていると言っているだろう、何が言いたいんだ？」

苛立ちながら質問すると天宮も諦めたのか、台詞を替えた

「じゃあキミは？」

は？

つまり猫の名前が聞きたくて、回りくどい言い方をしたらしい

一瞬、三人(?)は目を見開いた

闇の造産物に名などあるわけがない。そんな事は洋一郎も拓也も、勿論ネコも分かり切っているだけに、天宮の質問は異様に感じた

洋一郎が何か言う前に猫が答えた

「ワシは闇に造られた物、名など無い」

「そうなの？不便でしょ？」

天宮は意外そうに目を見張る

「いや、別にそん…」

「私がつけてあげるよ！」

猫の話などお構いなしに、天宮は宣言した

「なっ」

三人は仰天するが天宮は暴走中

ご満悦の様子だ

「闇のネコさんだからー…『ヤッコ』ちゃん！かわいいね」

「ぶっ」

「ンなッ…」

「」

聞いていた拓也はその名を聞くや否や吹き出して笑い転げ、洋一郎は目を点にする

『ヤッコ』

一番驚いているだろう本人（猫）はすっかり固まってしまっている

「ヤッコちゃんだって！ヤッコ！その面でヤッコちゃんっ イケるっー！！」

腹を抱え遠慮もなく爆笑する拓也はともかく

「だっ、誰がヤッコだー！！」

そこ、笑うなッ！指を差すんじゃない！！」

我を取り戻して慌てて訂正しようと抗議する猫、ヤッコだったが

「決まり！」

大満足で天宮は立ち上がり宣言！

聞いちゃいない……

一度決めたことは覆さない

そんな頑固な性格を最も把握している拓也は、泣き笑いながら

「無駄無駄」とヤッコに向けて手を小さく振り、

「諦める」と告げた

ヤッコは愕然とした様子で俄かに肩を落として去って行く

長い立派な尻尾も、心無し弱々しく地を引きずられていた

（なんか哀れだったなあ）

そんな背を見送りながら洋一郎は同情の眼差しを送ってしまう

先ほど怯えてしまった事が申し訳ないと反省してしまうくらいに

拓也はまだ、笑っている

天宮も上機嫌だ

(高林、話を聞いていた割に明るいな……)

むしろ、違和感を持つ

聞いて無いはずは無いのだ

『第一試合』の宣告を……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057e/>

闇に囚われし者～ダークメビウス～

2010年10月28日07時58分発行